地域を知ろう(46)　民話・伝説 No.26　桃園川緑道の今昔

桃園川の今昔

高円寺の真中あたりの低地をかつて西から東へ桃園川が流れていましたが、今、川は桃園川緑道となって緑の歩道に変わっています。

この桃園川は料岸がまだ水田であったころ、この田んぼの中を蛇行して流れ水を田に供給していた重要な農業用水でした。

この水源は天沼にあった弁天池から湧き出る水で、阿佐ヶ谷村から馬橋村を経て、高円寺村そして中野へ延長約七キロの川でした。

田んぼも整備され、水の需要も多くなると弁天池の水だけでは足りません。そこで玉川上水の分流であった千川上水の水、そして善福寺川の水なども引いて来ました。やがてこの田んぼに大きな変化が起こりました。

大正十二年九月の関東大震災で東京市中はまる焼けとなりました。その後の復興で目をつけられたのが中野・杉並など東京西郊の農業地帯でした。

この高円寺周辺の田んぼや畑なども宅地として整備され、人口も急速に増加しました。

桃園側も直線に改修されるなど、大正末期から昭和初期にかけてこの辺の景観も大きく変わってしまいました。

この川を中心とした町づくりが始められ、人々はこの地区を新開地と呼んでいました。ただ困ったことに、大雨が降ると洪水を起こして人々を悩ませることでした。真直ぐな水路では集中豪雨の時吸い込みが悪く、川の北側でかつての夜店通り、エトアール通りと呼んだ道路と、川の南側今の大久保通りの延長の処などは、膝位まで水が来て床上浸水もありました。この時の水の流れは谷川の急流のような勢いで、杉三小や杉八小の校長先生など自ら出てロープを引っぱって生徒を渡したりしました。水の引いたあとの道には大小の石が残り歩きにくいことこの上ありませんでした。川に渡してあった枕木のような上をおっかなびっくり渡ったことが懐かしい思い出になっています。この様な昔のことを思い出しながら桃園川緑道を歩いてみるのもよいのではないでしょうか。